

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

フィジー諸島共和国におけるソロモン諸島民の現在：  
ヴィティレヴ島西部S集落の事例から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5520">http://hdl.handle.net/10502/5520</a>

# フィジー諸島共和国におけるソロモン諸島民の現在

— ヴィティレヴ島西部S集落の事例から —

丹羽 典生

## 一 はじめに

本稿ではフィジー諸島共和国にて生活をしているソロモン諸島民 (Solomon Islanders) がおかれている状況について、ヴィティレヴ (Vilivatu) 島西部に位置するS集落の事例を中心に考察していく。

フィジーにおけるソロモン諸島民は、現在少数民族のひとつである。一九九九年のデータによるとフィジーの総人口はおよそ八〇万人にのぼり、原住民であるフィジー人四八・四%、インド人四六・四%及びその他の少数民族が残りの五・二%を占めている [Lau and Fortnum 2000]。少数民族には、華人、ヨーロッパ人入植者の子孫、パート・ヨーロッパ人と呼ばれるフィジー人と白人の混血、ポリネシア系のロトゥマ人とその他の太平洋諸島民が含まれている。太平洋諸島民はバナバ人、ツヴ

アル人などで構成され、そのなかに本稿の対象となるソロモン諸島民も含まれている。太平洋諸島民の総人口は、一九九六年の時点でおよそ一万人強である。ソロモン諸島民の経済的水準は概して低く、全体の六〇%が貧困層にあたることされ、高等教育を受けている者も一九九九年にはわずか一二名程度であった [Prasad, Dakuvula and Sneli 2001]。

ソロモン諸島民がフィジーへと定着した歴史的起点は、インド人契約労働者の導入に先駆けた時期で、一八六四年から一九一一年にかけてであった。彼らは綿花やヤシのプランテーション労働者としてフィジーへと来た [Halapua 2001: 27]。入植者との契約終了後、ソロモン諸島民はフィジー各地に散在したが、次第にソロモン諸島民の集落を形成していったという。

現在ソロモン諸島民の集落は、旧都レヴカ (Levuka)、現首都スヴァ (Suva) 近郊を中心に、フィジー各地に形成され

ている。ソロモン諸島民集落が都市部に集中している理由は、プランテーションでの契約が切れた後に、ソロモン諸島民が都市部の雑業の担い手へと追いやられた歴史的経緯と関連している [HALAPUA 2001: 39-40]。また、スヴァ近郊に位置するワイロク (Waiokū) には、英国国教会の神父たちによって、ソロモン諸島民——その多くが英国国教会派であった——へ保護の手をさしよるための居住区も建設された [HALAPUA 2001: 48]。

このようなソロモン諸島集落の立地状況と相即してか、既存研究は、レヴカに関する一部の研究を除けば [e.g. TAPU 1987]、首都近郊ごとにワイロクに集中している [e.g. KUVA 1971; HALAPUA 2001: 関根 二〇〇二]。ソロモン諸島民もワイロクを彼らの拠点として捉える傾向があり、筆者も「純粹な (pure) ソロモン」のことを知りたいのであれば、ワイロクへ行け」と、助言される経験も持った。

本稿では、旧都、首都から離れたソロモン諸島民集落の研究を補足するため、フィジー西部に存在するソロモン諸島民の一集落に焦点を合わせ、彼らが現在おかれている状況について報告していきたい。次章では、調査地の概要と、そこでのソロモン諸島民に特徴的な言語、社会組織、宗教、婚姻などについて整理し、原住民であるフィジー人の文化・社会的側面に同化している様を記述する。第三章からフィジー人への同化という動向に収まりつかない、ソロモン諸島民の近年の動きについて触れていきたい。

本稿が依拠するデータは、二〇〇〇年から二〇〇二年にかけて、フィジー諸島共和国ヴィティレヴ島西部に位置するラウトカ (Lautoka) 近郊のS集落とN集落を中心に行われた調査に基づいている。

## 二 とめどない同化

### 1 S集落の背景

フィジー、ヴィティレヴ島西部の都市ラウトカの北部に位置するバ(32)地方へ向かう途中、辺り一面がサトウキビ畑で覆われるなかにS集落はある。一見フィジー人の村落 (village) とかわりばえないこの集落、実はソロモン諸島民の集落 (settlement) である<sup>1</sup>。ソロモン諸島民の第三世代にあたるS集落の村役によると、集落で生活している総人口およそ三〇〇人、四八世帯のうち、ソロモン諸島民は約七二名、一一世帯と全体のほぼ四分の一を占めている<sup>3</sup>。残りはおおむねフィジー人で構成されるという。フィジー人とはいえ、S集落のソロモン諸島民の男性に嫁入してきた女性を除くと、住民の多くはソロモン諸島民と何らかの血縁関係を持つ人々である (詳細は後述)。その他にヴァヌアツの女性が二名に、インド人も男女一人ずつの計二人いる。

S集落の高齢者によると、彼らの祖先は、ヤサワ (Yasawa) ラウ (Lau) バ、シガトカ (Sigatoka) などフィジー各地にあった綿花やヤシのプランテーションを離れ、生活の場所と仕事を求め移動を繰り返した末に、S集落にたどりつい

た。彼ら祖先の多くは、ラウトカにてコロニアル製糖会社(Colonial Sugar Refining Company) 関連の雑務に就いてきたとされる。そして、ラウトカの都市化の進展と歩調を合わせるようにK集落へ、さらにはN集落へと生活場所を都市中心部から郊外へと移転させてきた。

N集落は、おそらく一九世紀末から一九三〇年までにある程度形成されていた。なぜなら一八九二年頃ソロモン諸島民へ説教を施すために、英国国教会の神父がN集落へと不定期に訪問していた記録が残されているし〔Robo 1988: 44-47〕、また、首都スヴァの英国国教会派の教会に収蔵されている洗礼記録によると、遅くとも一九三〇年頃にはN集落のソロモン諸島民の存在を確認できるからである。そして第三章に述べるように、一九九五年前後に都市化のさらなる進展にともない移転の必要性が生まれたことや集落内部の対立から、N集落のソロモン諸島民の多くはS集落に移り住むことになった。

S集落のソロモン諸島民は、サトウキビ産業が盛んなヴィレイヴ島西部の事情を反映して、S集落の立地する乾燥地帯でサトウキビ関連の仕事に従事している者が多い。調査時には、フィジー砂糖会社(Fiji Sugar Corporation) 勤務の者が七名いた<sup>(5)</sup>。他にも定期的な仕事がない男性の多くは、タピオカを中心とする生計維持経済を営む傍ら、サトウキビ刈りの季節にはサトウキビ刈りに参加して現金収入を得ている。

## 2 S集落の文化・社会的状況

それではS集落のソロモン諸島民が、どのような文化、社会的特徴を備えているのか検討していきたい。まず、言語について見てみよう。現在S集落を生活拠点としているソロモン諸島民のなかで、ソロモン諸島の言語を話せる人間は一人もいない。若い世代はもちろんのこと、およそ移民第三世代にあたる七〇代以上の老人たちでもソロモン諸島の言語に関する運用能力を有する者はいない。わずかに数人の老人がいくつかの単語を知っていたのみである。しかも、村役を務めている老人は、ソロモンの諸島の言葉を二、三、記憶していたが、その単語はすべて「汚い言葉(vosa ca)」であるため口にしたくないと話していたし、最高齢の老人もいくつか耳にした記憶のある音の連なりを口にしてくれたが、何を意味するかまでは正確に分からないという水準であった<sup>(6)</sup>。

彼らの主たる生活言語は標準フィジー語<sup>(7)</sup>である。近隣で生活するフィジー人の影響で西部フィジー語方言を理解できる者も多い。大半の人が学校教育を通じて英語の能力も獲得しているものの、日常会話はもちろん集落内での会議の場で使用される言語のほとんどはこの標準フィジー語である。また、S集落が位置するパ地方はインド人の集住地帯で、学校、職場などをはじめとする日常的な接触からヒンディー語を習得している者も珍しくない。

同様に、S集落内もフィジー人村落と同じように整備されて

いる。集落中央に広場 (*vava*) が配され、その脇にメソデイストの教会がひとつ建てられているという典型的なフィジー人村落の形態となっている。

S 集落内の社会組織の形態もフィジー人のそれと類比的な形で構造化されている。通常フィジー人の村落には、拡大家族が集まりマタンガリ (*matigali*) と呼ばれる単位が形成されている。この単位はおおむねリネージカサブ・クランに相当する父系出自集団で [RAVUVU 1983]、村落内で執り行われる様々な儀礼の際に、活動をともしにする基礎的な集団の単位となっている。

S 集落も、フィジー人村落の社会組織と同様に、父系出自集団で、儀礼活動などの際に活動単位となるマタンガリによって区分されている。S 集落には主としてカレカナ (*Kalekana*)、マラタ (*Maruta*)、バリ (*Bali*)、ワイ (*Wai*) の四つのマタンガリが存在している。S 集落のマタンガリは、フィジーに到着した祖先を基点として、その子孫が集まって構成されている。たとえば、カレカナはソロモン諸島ガダルカナル (*Guadalcanal*) のホニアラ (*Honiara*) 出身の祖先を共有している人々の集まりである。マラタはソロモン諸島マライタ (*Malaita*) にある、コア (*Koa*) あるいはアレアレ (*Ale-are*) 出身者が起点であるとされる。バリ、ワイは、それぞれ祖先を共有する二組の親族集団が合併して各ひとつずつのマタンガリを形成している。バリ、ワイの人々は、起点にあたる祖先の具体的な出身地について記憶していない<sup>(3)</sup>。

各マタンガリに含まれるソロモン諸島民の数を見てみたい。それぞれ概ね、マラタは七、カレカナは六、バリは三、ワイは三の家族 (*matanivale*) が各マタンガリの一部を構成している。マラタにはフィジー人の男性が婚入して作られているフィジー人の家族も六含まれ、合計一三家族から構成されており、S 集落のなかで最大のマタンガリとなっている。マラタの例のように、S 集落で生活しているフィジー人も、各人の親族関係を通じて各マタンガリに所属し、葬儀、婚姻に際してマタンガリ毎に割り振られた義務をソロモン諸島民とともに遂行している。

ただしフィジー人の社会組織においては、マタンガリが集まり概ねクランに相当するヤヴサ (*yavusa*) を形成するのであるが、S 集落においてヤヴサに相当する組織は存在しない。また通例ヤヴサの首長が村落秩序の中心に位置するが、S 集落では行政的に任命された村役しか存在しない<sup>(4)</sup>。

S 集落は、ソロモン諸島を訪ねた経験がある者、ソロモンにいたる親族との接触が現在にいたるも続いている者は一人もいない。ソロモン諸島へ帰還訪問した経験を有するいまのところ最後の人は、N 集落にとどまったワイの第二世代の老人であった。二〇〇〇年の彼の死を最後に、N 集落でも、S 集落でもソロモン諸島とのコミュニケーションは現在のところ途絶えているという。

現在のS 集落のなかから何か文化的、社会的にソロモン的なものを見つけたことは難しい。自身ソロモン諸島民でソロ

モン集落に関する書籍をものしているアンドル・クヴァは、「ソロモン諸島民はフィジー人に完全なる同化を果たしている (totally assimilated) ので、S集落に限らずソロモンの文化的要素を見つけたすことは困難である」と、筆者に話してくれた。事実、フィジーへの同化傾向は、特にS集落の特徴というよりはフィジーのソロモン諸島民集落に多かれ少なかれ共通する特徴である [cf. Kuva 1971; Halapua 2001]。

しかし、他のソロモン諸島民集落に比しても、S集落はフィジー人への文化、社会への同化の度合いがすずんでいると思われる。たとえば、ソロモン諸島民の中心的宗派であった英国国教会の影響力も、S集落では薄れつつある。S集落にある教会はフィジー人の過半数が信奉しているメソディズムであるし、住民の信奉する宗派も、メソディズムにカソリック、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド、ペンテコストなどの諸宗派が混在しており、英国国教会を信奉していると答えた人は一人もいなかった。いまにいたるも多数の英国国教会派を抱え、首都から相対的に近いワイロクヤナヴァ (Vanua) 近郊の集落と比較すると際立った特徴であるといえる。

### 3 通婚

以上のような言語、集落の形態から社会組織までにいたる様々な側面において、フィジー人との同化がすずんだ大きな要因のひとつとして、民族間での通婚が挙げられる。ソロモン諸島民にとってフィジー人との婚姻はありふれたことで、逆にソ

ロモン諸島民同士での婚姻の方がまれである。ソロモン諸島からフィジーへと移入されたソロモン諸島民を含むメラネシア系移民の総数は、およそ二三〇〇〇人程度で、移民集団としての規模が小さかったことがこうした婚姻形態となった理由のひとつとして考えられる [Kuva 1971: ]。調査時点のS集落でソロモン諸島民同士の婚姻は一例しか見つからなかった。その他に、インド人との婚姻が二例、ヴァヌアツ出身者との婚姻が二例見受けられたものの、これ以外の婚姻事例では、結婚相手にはすべてフィジー人が選ばれていた。

これまでソロモン諸島民と述べてきたが、彼らとて祖先のどこかでフィジー人との親戚関係を持っている。一例のみ見つけられたソロモン諸島民同士の夫婦も、彼らの祖父の代までさかのぼれば、フィジー人の親族が存在している。現世代で「純粋な」ソロモン諸島民同士の婚姻が継続している事例は、S集落では絶えて見かけなかった。こうしたたびかさなる民族間通婚の結果、形質的特徴もフィジー人と区別がつかない場合が多い。まれに髪の毛が直毛で、色黒なフィジー人らしからぬ風貌の子供が産まれると、「あれを見ると、あれがソロモンの血だ」と冗談交じりからかわれることがあるほどである。

### 4 系譜図への登録

また、S集落で生活しているソロモン諸島民のなかには、系譜図 (Totia Kanua Buta) に登録されている者もいる。系譜図とは、フィジー人が各人のヤヴサ、マタンガリ、トカトカ

(*tabatoken*) 毎に登録されるフィジーの戸籍にあたるフィジー人のための制度である。この文書に登録されていることは、フィジー人として享受する土地所有の権利、フィジー人への優遇政策 (affirmative action) をはじめとする様々な権利を得るための必要条件とされる。系譜図の登録は、通常各人の父方の系譜図に登録されることになっている。しかし、私生児など父親が明確でない子供が産まれた時など、母方の系譜図に登録することもまれではない。父方の系譜図に登録された者は父方の村落における土地所有権と関わることになり、母方の場合も同様、母方の村落と関与することになる<sup>(15)</sup>。母方を通じて系譜図に登録するには、母の所属するヤヴサヤマタンガリとの交渉が必要となる場合もあるといわれている。

S 集落では、マラタとワイのマタンガリに属する家族が、母方の系譜図に登録されている。ともにソロモンからフィジーにきた祖先の婚姻相手であるフィジー人女性の属する系譜図に、彼女の子供を登録したためで、現在四、五世代目まで続く彼らの子孫全員がこの系譜図に登録されている。どのような交渉を通じて、系譜図への登録が認可されたのかは、現在正確なところは分からない。マラタ、ワイに属する人々にも、具体的な経緯は記憶されておらず、かつては系譜図への登録が鷹揚に行われていたのだ、と曖昧に語られるのみである。他のカレカナ、バリの人々は、系譜図には登録されていない。つまり、マラタとワイの人々は、母方の系譜図へと登録されることを通じて、フィジー人が享受している土地所有権などへアクセスする可能

性を担保している一方、カレカナ、バリにはそうした権利にあずかる可能性がないといえる。

### 三 同化の限界

前章では、フィジーにおけるソロモン諸島民が、とめどないフィジー人の社会・文化への同化のなかにおかれていることを S 集落の事例から指摘してきた。現時点で社会・文化的特徴から、フィジー人とソロモン諸島民を分かつことは、クヴァの発言に見られるようにソロモン島民自身にとっても、容易ではない。

#### 1 ソロモン諸島民であること

これまで「ソロモン諸島民の集落」と一括して記述してきたが、S 集落で生活している人々をいくつかに区分することができる。一口にソロモン諸島民集落といっても、その内実においては、①ソロモン諸島民と②母方の親族を通じてフィジー人の系譜図に登録されているソロモン諸島民の二範疇がある。どちらも自称、他称ともにフィジーにおいてはソロモン諸島民である。そして、③父親はフィジー人であるが母親はソロモン諸島民である人々と、④婚入してきたフィジー人の二範疇である。後二者は、自称、他称ともにフィジー人である。S 集落はこの大きな四範疇の他インド人、ヴァヌアツ出身者若干名で構成されているのである。

それではソロモン諸島民は何を持ってみずからをソロモン諸

島民としていたのであるうか。まず、S集落にて生活する①②の人々で、「君は何人だ（O *kai ve!*）」との質問に、私の知る限りフィジー人だと返答した者は一人もいなかったという事実を確認したい。一般に「ソロモン（*kai solomoni*）」と答えている。この返答の根拠とされるのは当人の父方の出自のみである。この際、出自以外の社会・文化的要素は考慮されていない。

つまり父親がソロモン諸島民である場合は、ソロモン諸島民として返答している。この分類に、母方の民族的出自は関与しない。また、②の人々のようにたとえ母方の親族を通じてフィジー人の系譜図に登録され、権利上一段有利な立場にいたとしても、ソロモン諸島民はソロモン諸島民として自己を分類していた。<sup>(16)</sup> 同化のなかにも残りつづけるソロモン性があるといえる。

本章からは、これまでの論述とは逆に、ソロモン諸島民がソロモン諸島民である意識を高めていると思われる事例を紹介したい。

## 2 集落の移転からソロモン諸島独立の祭りへ

まず、ソロモン諸島民がN集落からS集落へと移転したことにまつわる経緯を検討していきたい。N集落は、先に述べたように一九世紀の末から徐々に形を整えていたソロモン諸島民集落である。二〇〇二年の時点で、一〇エイカアの土地区画に人口六三二人、一二五世帯を抱えており、狭いスペースに多くの

人々がひしめき合っている。また、都市近郊に位置しているにもかかわらず、電気がいまだに使用できないなど生活基盤の整備も遅れた地域である。N集落に比して比較的最近に形成されたばかりのS集落では、電気はすでに整備されている。

筆者がN集落に足を踏み入れた際、集落内にはソロモン諸島民は二世帯のみで、住民のほとんどは民族間通婚の果てにフィジー人——父系のラインにフィジー人が存在している人々——によって構成されていた。<sup>(17)</sup> N集落はカレカナ、バリ、ヴァタレカ、ワイ、マラタのマトンガリに区分されていた。

このうちカレカナは、移民二世帯目が一人を除いて全て女性であった。その女性たちすべてはフィジー人と婚姻している。唯一の男性には三名男子が生まれているが、彼らはすべてN集落から離れて生活している。彼からは女兒も四名生まれており、彼女たちはすべてN集落に留まっているが、彼女たちの結婚相手は全員フィジー人である。そのためカレカナはほぼフィジー人のみで構成されていることになる。バリではソロモン諸島民二世代にあたる子供四人全員が女性で、しかもその娘の婚姻相手は全員フィジー人であったため、現在ほぼ全員がフィジー人で構成されている。同様の事情からヴァタレカもフィジー人のみで構成されている。ワイでは、移民二世代のソロモン諸島民男性に子供が産まなかった。そのため彼の扶養していたフィジー人がいまではワイの構成員となっている。

N集落でソロモン諸島民の世帯を形成しているのは、ワイの一世帯とマラタの一世帯のみである。後者はS集落へ移転した



マラタの一世帯がN集落に留まったのである。

S集落への移転理由についてはS集落の村役は、ラウトカのさらなる都市化の進展やN集落の人口密度の増加と生活空間の狭隘さのため、N集落には新たな家屋を建造やタピオカなどの食物を耕作する余地がないことを理由として挙げた。こうした集落内の状況を見かねて、現S集落の村役を中心とするソロモン諸島民の老人数名が政府と交渉してS集落の地——国有地にあたる——を手にしたとのことである。

しかし、この「公式的」見解とは別に、ことにS集落で生活している人々のあいだには、N集落から転出した理由の一端が感情的しこりから起きたと考えている人は多い。彼らのなかには、N集落の村役T氏がN集落をフィジー化していく方向性に批判的な人々がいるのである。

それはN集落の村役をしているフィジー人T氏の手による同集落のフィジー化への動きである。先に述べたように通婚を通じて徐々にフィジー人の比率が高まっていく民族別人口比率の変化を反映してか、N集落をフィジー化していくこうとする動きが、S集落への移転前一九八〇年代始め頃から存在していたという。中心人物はT氏で、彼の妻はソロモン諸島民第三世代マラタの女性であるため、彼も彼女に従いマラタの成員となつて<sup>(18)</sup>いる。

T氏は筆者に対して、「まわりを見ていただければ分かるように、この集落はフィジー人の村落と変わりがない。それにも関わらず他の村落のように国からの援助が来ないのは不当だ」

と、N集落の整備の遅れに対していらつきを表明していた。彼の説明するところによると低開発の原因はフィジーの村落になりきっていない点にあるというのである。この遅れを打開しフィジー人の村落と同じ権利を獲得する策が、N集落のフィジー化だ<sup>(19)</sup>というのだ。T氏によるとN集落をフィジー人と同じフィジー人信託局の管轄下に置くべく、政府に働きかけているところである。また、N集落をフィジー人の村落と同様、首長と宗教を備えた地にするよう、同地の地主に当たる首長へと庇護を依頼しているとのことである。

T氏のこうした活動は集落内特にソロモン諸島民とのコンセンサスを十全に図つていなかった。また、N集落はそもそもソロモン諸島民のための集落であつたにもかかわらずフィジー人であるT氏が指揮を執ることへの反発もあり、T氏を支持する人々とソロモン諸島民とのあいだに軋轢をみだし、感情的な言葉の遣り取りも一時期交わされたという。現在S集落で生活しているソロモン諸島民のある中年女性は、興奮しながらS集落への移転理由を次のように述べてくれた。

こちらへ移転してきたのはちよつといざこざがあつたから。もちろん私たちのなかにソロモンの血が流れていることは否定できない。でも、フィジー人と何の違いがある。

言葉も習慣もフィジー人とかわりない。すでに系譜図にも記載されているので、なおさらフィジー人と同じだ。でもフィジー人としては扱われず、こちらの意見が軽んじられ

る。

この発言には、フィジー人との社会・文化的に同化していくことに対する二律背反的な感情をよく表していると思われる。フィジー人との同化はすでに社会的事実として生活のなかに浸透しており、ソロモン諸島民はそれに対して必ずしも批判的な感情を抱いている訳ではない。とはいえ、いつくかの権利の上では、フィジー人とあからさまに区分されているソロモン諸島民の現状に対しては不満を表明している。こうした感情がT氏のソロモン諸島民自身の意向を軽視しているかのような動きに対する不満という形で表出したと思われるのである。

S集落で生活を送る四世代目のソロモン諸島民の青年も、「N集落は、わたしたちの祖先が住み着いた場所だ。あそこはソロモン諸島民のもので、フィジー人のもは何ひとつない」と、彼らの考え方に対する配慮を欠いたT氏の動きに対して反発の意をこぼしていた。

いずれにせよ、N集落にいたソロモン諸島民の大多数がS集落へと移転しているのが現状である。こうした衝突を通じて、S集落のソロモン諸島民の多くが、ソロモン諸島民であるという意識を高めたであろうことは想像に難くない。

たとえばS集落では、二〇〇二年七月一三日にソロモン諸島の独立を祝う祭りを復活させた。S集落の村役によると、この祭りは一九七八年七月七日ソロモン諸島本国が独立したことを祝い、以前に開かれたことがあった祭りを復活させたものであ

るという。ソロモン諸島の独立を記念するこの祭りは、ソロモン諸島民であるという歴史的な遺産を子供たちに伝えるために、これから毎年開きたいと、祭りの実行委員の一人は述べていた。そしてほとんどすべての家族がフィジー人と結婚しており、全員が標準フィジー語を共通語として話している、にもかかわらず、ソロモン諸島民は依然として土地を持たず、部外者のように扱われる現状を訴えていた。

#### 四 最後に

以上、フィジー諸島共和国にて生活しているソロモン諸島民が、婚姻などを通じてフィジー人の文化、社会へと同化していく傾向にあることをS集落の事例から検討してきた。ただし、N集落からS集落へとソロモン諸島民が移転する際の騒動や、S集落にて開催されたソロモン諸島の独立を祝う祭りの例に見受けられるように、ソロモン諸島民である意識を高めるような出来事をも散見することができる。

もともと後者の動きは、ソロモン諸島民が単純に彼ら独自の民族性を主張していると捉えるべきではない。S集落への移転にまつわる中年女性の言葉や、ソロモン諸島独立祭の実行委員の説明にうかがえるように、ソロモン諸島民として部外者扱いされフィジー人として扱われないことへの不満の表出でもあるからである。つまり独立祭は、ソロモン諸島民としての出自を認識させられたS集落の人々が、フィジー人と対等に扱われるよう主張しているとも解釈できるからである。

ソロモン諸島民のこのような民族としての曖昧な立場は、クーデタなどを通じた近年のフィジー人ナシヨナリズムの興隆を受けて揺り動かされている彼ら自身の民族的アイデンティティのあり方も相即している。一九八七年のクーデタが起こる前には、フィジー国の民族カテゴリー<sup>(2)</sup>において、ソロモン諸島民はフィジー人と同じカテゴリーのなかで一括して扱われていた。これは、ソロモン諸島民が、相対的に人口規模が寡少であったことはもちろんのこと、第二章で述べたような婚姻関係を通じて、ソロモン諸島民がフィジー人たちと、かなりの程度の文化・社会的同化を果たしていたためであったとされる。しかしクーデタ以降一九九〇年憲法で再編された民族分類では、フィジー人とは別の集団として、「一般」の範疇へ再分類された。この範疇は、入植者の子孫であるヨーロッパ人などと一括して構成される範疇である。その後の憲法改正を通じてもこの区分は保持され、現在にいたっている [SRENDRA, DAKUVULA and SNEEL 2001]。

ソロモン諸島民のアイデンティティを主張していくことにも繋がりがかねない動きが、独立を祝うようになったS集落において、今後強まっていくのか、それともひきつづき同化のなかへと埋もれていくのかは、にわかに判断できない。政治を舞台とする民族対立が依然として幅を利かせるフィジーのなかで、フィジー人との同化の波にさらされたソロモン諸島民についての継続した調査が必要とされるであろう。

## 謝辞

草稿に目を通していただいた査読の方々に記して感謝いたします。なお、本論の依拠したデータの収集にあたり二〇〇〇年及び二〇〇一年度大和銀行アジア・オセアニア財団の資金援助を得ました。

## 注

(1) フィジーでは、フィジー人行政局の管轄にある居住域は村落とされ、それ以外は集落と呼ばれる。ソロモン諸島民の日常会話では区分せず、どちらもフィジー語で村 (*koro*) と呼ばれることが多い。

(2) 正式には *advisary council* だが、日常的には村役 (*tuna-gu ni koro*) と呼ばれる。村役とは、ソロモン諸島民ではなくフィジー人村落の行政村長を指す言葉である。文中ではソロモン諸島民の通常用法に従い村役と統一して表記してある。

(3) このデータはS集落を管轄している村役から入手した公式的データである。ただし、N集落とのあいだの移動も激しく、正確なデータを数え上げることは難しい。

(4) コロニアル製糖会社とは、後出するフィジー砂糖会社の前身にあたる企業である。

(5) 他には服飾工場勤務が二名、運送業従事者が一名いた。

(6) ソロモン諸島の言語と表記してあるが、これはインフォマントの「ソロモン諸島語 (*vosa vakasolomoni*)」とさう

表現にあわせたものである。実際のところ、ソロモンは多言語国家であり、単一のソロモン諸島言語なるものは存在しない。ちなみに、老人が口にした言葉とは、*"mulevo"*、*"mena"* というものであった。それぞれ「お金」「いいえ」を意味するといわれたが、筆者は事実関係を確定できていない。

(7) 標準フィジー語とは、フィジー東部のバウ地方の方言と、語彙、文法の点で共通性の多い言語である。現在、フィジーのテレビ、ラジオ、新聞等のマスメディアではこの言語が共通語として使用されている。

(8) シーゲルによると、ワイ (Wai) はマライタの北東部、ヴァタレカ (Vataleka) はファタレカ (Fataleka) から由来している [Seegeel 1987; Halapua 2001: 51]

(9) この地名は必ずしも具体的な場所に対応している訳でも、皆に明確に記憶されている訳でもない。たとえば、カレカナに属するある老人は、自分をガダルカナルのホニアラ村出身であると説明した。しかし、ホニアラを村と認識してない人も多かった。一方マラタに属する別の老人によると、コアとは村落の名前で、アレアレとはコア村に住む「人種 (race)」を意味すると説明してくれた。

(10) 筆者の知る限り、別の集落にて生活しているソロモン諸島民のなかには、ヤウサを申告している事例も見受けられ、ソロモン諸島民のあいだでも一様ではないと思われる。また、注(14)を参照のこと。

(11) これは二〇〇二年時に行ったインタビューにおける発言。

クヴァは、フィジーのソロモン諸島民で初の大学学位の取得者。『フィジーにおけるソロモン・コミュニティ』という著作をものしている。

(12) ワイロクの状態に関しては Kuva [1971], Halapua [2001] を参照のこと。ナヴァ近郊の集落では、村の中心に英国国教会の教会があり、ソロモン諸島民の過半数がいまでも英国国教会派である。

(13) 一三〇〇〇人のうち七五%がソロモン諸島民ではないかといわれている [Kuva 1971: ]。また、ここにはソロモン諸島への帰還者、渡航時の死亡者も含まれていると思われる。フィジーに留まった人数はもっと少なかったと推測できる。

たとえば、一八八一年の統計では六一〇〇人が太平洋諸島民として数えられているに過ぎない。一八九一年の統計ではさらに二二六七人へと劇的に減少している [Lal 1992: 336-337]。ちなみにインド人移民はのべ六万人ほどフィジーへと留まることを選択した [Lal B. and K. Forrune 2000]。

(14) フィジーの社会組織は父系をたどり、上位範疇から、ヤウサ、マタンガリ、トカトカとなる。それぞれ、おおむねクラン、リネージ、拡大家族に相当している。ただし地域毎の差異は大きい。

(15) 母方を通じた系譜図への登録の是非は、土地所有と関連していることもあり、村落会議はもちろんのこと、国家レベルでも政治的に非常に敏感な話題となっている。この問題については、RILES [1997] の研究が、ヨーロッパ人とフィジ

一人との混血を事例としているものの、示唆に富む。

(16) フィジーの社会組織は、母方の親族との関係も特定の儀式の場で強調されるものの、基本的に父系の繋がりが重視されている。混血を示す表現がない訳ではないが、各人の出自のアイデンティティも父方を通じて決定され、たとえばR村落出身の父を持つ者は、母方の出自に関わらず基本的にR人であるとされる。現在、ソロモン諸島民のあいだに見受けられる出自意識も、フィジー人と同型である。

(17) 私見の及ぶ範囲では、その他にウエア人一世帯、サモア人一世帯、ロトゥマ一人一世帯が生活していた。

(18) T氏によると、彼が村役に就任したのは一九八〇年頃のことである。ただしN集落において誰が村役であるのかには諸説存在している。ことにT氏の属するマラタ以外に所属する人々のなかには、フィジー人、ソロモン諸島民という民族差とは無関係に、そもそもT氏を村役として認知していない人も少なくない。N集落のフィジー人の中年男性数名——彼らはバリの成員——と言葉を交わしていると、「あれ(T氏のこと)は村役ではない。この村には村役はいないし、この村のことならU氏に頼め」と政府関係の仕事に従事している別の男性を紹介してくれた。このように村役が誰か混乱が起こることは、通常のフィジー人村落ではまずあり得ない。

(19) T氏の動きが政府を通じて公式に認められていくことになるかどうか、現時点では分からない。N集落が位置する地所の地主にあたる村落側の村役によると、この議題を地区議

会の場に持ち出したが、反応は芳しくなかったとのことである。同村にもN集落をフィジー人村落とする動きに呼応する積極的な支持者が生まれる様子も見られないと、同村役は話していた。

(20) ただし対立をあまり深刻なものと思えるべきではない。現在でもN集落とS集落のあいだでの行き来は、普通になされている。後に述べる独立記念祭にもN集落の人の一部は参加している。

(21) 一般のソロモン諸島民参加者には、こうした公式的な思惑とは関係なく、集落の資金集めのために、あるいはたんなる楽しみとして参加している人々も数多く見受けられた。ここに記載した独立祭の名目が、どこまで彼らのあいだに共有されているかは注意が必要である。たとえばS集落、N集落のなかでソロモン諸島が何年の何月に独立したのかを明確に記憶している人は誰もいなかったため、独立祭を企画する段階で調査が行われた。

(22) フィジーでは、国民はフィジー人、インド人、一般(Other)に区分され、選挙に際して、各民族は民族毎の立候補者への投票権を持つている。

#### 参考文献

Barr, K. 1990 *Poverty in Fiji*. Suva: Fiji Forum for Justice, Peace and Integrity of Creation.

HALAPUA, W. 1987 "Matata: Solomons in Town." in *In*

- Search of a Home. MASON, L. and P. HERENIKO (eds.). Suva: University of the South Pacific.
- 2001 *Living on the Fringe: Melanesians in Fiji*. Suva: University of the South Pacific.
- KAMIKAMICA, J. 1997 "Fiji Native Land: Issues and Challenges." in *Fiji Constitution Review Commission Research Papers: Volume I Fiji in Transition*. LAL, B. and T. VAKARORA (eds.) Suva: School of Social and Economic Development. University of the South Pacific.
- KUVA, A. 1971 *The Solomons Community in Fiji*. Suva: South Pacific Social Sciences Association.
- LAL, B. and K. FORTUNE 2000 *The Pacific Islands: An Encyclopedia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- PRASAD, S., J. DAKUVULA and D. SNEEL 2001 *Economic Development, Democracy and Ethnic Conflict in the Fiji Islands*. Suva: University of the South Pacific.
- RAVUVU, A. 1983 *Vaka i Tautaki: The Fijian Way of Life*. Suva: University of the South Pacific.
- RILES, A. 1997 "Part-Europeans and Fijians." in *Fiji Constitution Review Commission Research Papers: Volume I Fiji in Transition*. LAL, B. and T. VAKARORA (eds.). Suva: School of Social and Economic Development. University of the South Pacific.
- ROBO, J. 1998 *From Chaplaincy to Church: The Anglican Mission in Fiji 1870-1960*. Bachelor of Divinity. Suva: Pacific Theological College.
- SIEGEL, J. 1987 *Language Contact in a Plantation Environment: Sociolinguistic History of Fiji*. Cambridge: Cambridge University Press.
- TAPU, T. 1987 "The Solomonis of Ovalau." in *In Search of a Home*. MASON, L. and P. HERENIKO (eds.). Suva: University of the South Pacific.
- WHONSON-ASTON, C. W. 1970 *Pacific Trishman*. William Floyd Inaugural Memorial Lecture. Sydney: Australian Board of Missions.
- 関根久雄 二〇〇二 『「ブラックスターディング」は終わらない——フィジーにおけるソロモン諸島系住民の「階級性」とその表象』「島々と階級——太平洋諸島国家における近代と不平等」塩田光喜(編) 東京: マジック経済研究所。